

主人と船に乗って1年

豊間漁業協同組合婦人部

橋本初代

1 地域と漁業の概要

私が住んでいるいわき市豊間（とよま）は、美空ひばりの「みだれ髪」で有名な塩屋埼灯台の根元にあります。漁港、組合事務所共にこじんまりとしています。5～6トン級船の稼働隻数は6隻と少なく、着業者数からみると、2トン未満船による沿岸1本釣り、アワビ・ウニを対象とした採貝藻漁業が主体となっています。当地でも後継者不足の問題は深刻で、後継者の見込みがある船は極めて少ない状況です。組合の販売事業は、アワビ、ウニでは活発ですが、その他の魚類では数量がまとまらないために、他港水揚げをするか直接中央市場まで搬入しなければなりません。

2 私が船に乗るようになった動機ときっかけ

私は、主人と結婚して9年になります。現在6歳の娘、5歳と3歳の息子の3人の母親です。結婚するまでは、漁業のことは何も知りませんでした。もちろん、結婚した当時は私が船に乗るようになるとは夢にも思いませんでした。

結婚した当時は、義父も健在で、主人と親子で漁業を営んでおりました。結婚した昭和63年には、底びき網も出来るようにと、前の船より少し大きな船を新造しました。新造船での水揚げは順調でしたが、平成3年に義父が突然の発病で入院、手術したものの翌年の平成4年に亡くなりました。あまりにも早かった義父の死。まだまだ親子で頑張れると思った主人は、漁業をどうやって続けていこうかと悩みました。それまで続けてきた1そうかけ廻りによる船曳き網漁業は、1人乗りでの操業では効率が悪く、危険を伴います。人を頼むのにも当てがなかったため、遊漁船業を主にしながら1人乗りでも出来る漁業をするしかないとも考えました。それでも何とか知り合いの人を頼んで、今までに何人かの人に船に乗ってもらいましたが、年間を通して乗ってもらえる人はありませんでした。頼んだ人は、主人とは親子ほども歳の離れた人が多かったせいもあり、主人は色々と気苦労が多かったようです。また、相手の人の都合で船を休まなければならない日もありましたし、逆に、主人の体調が悪い日や、何か予定のあるとき、海の悪い日でも多少無理をしてでも漁に出るようなこともありました。主人は言葉には出しませんが、精神的にかなり負担があったようです。経済的にも、年間をとおしての賃金は、少なからぬ負担でした。特に、漁のない時期には大きな負担でした。

色々な面で苦勞している主人をみていて、私でも何とか船に乗って手伝えないものかと真剣に考えるようになりました。

当時、私は、船が入る時間には、市場に行って魚揚げの手伝いをやっていました。獲ってきた魚は、主に隣の浜の沼之内漁協に水揚げをしていますが、その浜では、5そうの小

型船のうち、2そうが夫婦船でしたので、その奥さん達の活躍ぶりを見ていたことも私の決意に大きな影響を与えましたし、大きな励みにもなりました。そして、私の方から、船に乗ることを主人に相談してみました。しかし、船に乗ることで心配ごともありました。1つは、子供達がまだ小さく、しかも、まだ眠っている間に家を出なければならぬことです。もう一つの心配は、船酔いでした。

3 苦勞と喜び

私が船に乗りたいと主人と相談し、家族で話し合った結果、義母には、「子供達のことは心配しなくても大丈夫だから」と言ってもらえました。義母には、私が船に乗っている間の子供の面倒については全面的に世話になりましたが、実際にはむしろ子供達の方に大きな精神的負担をかけてしまっていたようです。丁度小学校へ上がったばかりの娘は、朝起きてから学校へ行くまでの間私がいなくてということに不安を感じたのか、非常に情緒が不安定になり、ぐずって義母を困らせるようになりました。そんな娘に、学校へ出かける時間に、船から電話をして励ましているうちに、娘も、私が船に乗って仕事をするをだんだん理解してくれるようになりました。

もう一つの心配事の船酔いは、最初の頃は、酔い止め薬を飲んでも酔ってしまいました。が、それでも、3ヶ月くらいたつとだいぶ慣れてきました。

私は、主人より1時間くらい早く起きて、船に持っていくお弁当の準備、子供達の朝食の準備と小学校、保育園の支度などをしてから家を出ます。漁から帰ってくると、家事と甘え盛りの3人の子供の世話でなかなか夜も早く休めません。漁場までの行き帰りには、船の上でついうとうとしてしまうということもありました。そんな睡眠不足にもずいぶん慣れました。しかし、唯一、船の上で女性として不便を感じるのはトイレのことでしょうか？。

船の仕事にも慣れ、主人と2人でがんばって1年になります。この1年間で船曳き網、曳き釣り、深海のマダラ釣り、タコかごと経験してきましたが、最近では、少し余裕が出てきたのか、漁の難しさ、獲る喜び、工夫して獲れたときの喜びが少しずつ分かってきました。特に、メジ・カツオの曳き釣りやタラの1本釣りで魚が掛かったときの感動は新鮮でした。もちろん、失敗してしまったこともたくさんあります。船曳き網では、なぜか、ここ1番という時に限って、どん尻のチャックを閉め忘れてしまうということもありました。

船の仕事の大変さを身を持って体験できた今では、主人の苦勞が良く分かりました。夫婦間の絆も強くなったような気がします。

4 今思うこと

今、どこの浜も漁業後継者、漁業従事者が不足しています。他産業では、近年働く女性が増えています。現在の漁業は機械力中心なので、私のような女性でも船の上でも十分活躍できることを身を持って体験することが出来ました。事情により2人乗りから1人乗りになって、船曳き網をやめてしまった船や、1人乗りでも何とか苦勞してやっている船も多いと聞いています。この様な船では、事情さえ許せば夫婦で力を合わせれば、少し余裕のある操業が出来るのではないかと思います。

私の家では、漁業の他に少しばかりの稲作もしていますが、田植えや刈り入れの時期にな

ると、船を休まなければなりません。また、小学校、保育園で行事のある時、子供が熱を出した時などは、私は船を休まなければなりません。そんな時には、明日漁に出るかどうかは、夫婦で話し合っ決めてようになりましたので、無理な出漁はしなくなりました。人を頼んで出漁していた時と比べると、出漁日数は減りましたが、漁にゆとりが出来ましたし、何よりも精神的に随分余裕が出来たようです。また、経済的にも少し余裕が出来たと思います。今では、子供の行事があれば、船を休んで夫婦で出かけることも出来るようになりました。

漁業は、3K産業の代表のように思われています。私の目から見てもこれは一部当たっていると思います。しかし、私のような女性でも、船の上で十分務まることを見せれば、後継者の見方も随分変わると思います。また、夫婦2人でも十分やっっていけるような、ゆとりのある漁業の実現が、今後の漁業の1つのあり方になっても良いのではないのでしょうか。

主人は、小さい頃から船に乗せられて育ち、船と海が好きで漁業を継いだそうです。そして、出来れば将来、子供達に船を継がせたいと思っているようです。漁業を身を持って体験した今、私自身も漁業のすばらしさが少しずつ分かってきました。子供達も、主人のように海や船が好きで、船を継ぎたいと言うときには、私も応援してあげたいと思います。

最後になりますが、全く漁業を知らなかった私の、ほんの少しの漁業の体験をとおして今思うことは、現在の、他人と争うように獲る漁業から、精神的、肉体的、経済的にゆとりのある漁業への脱皮が必要ではないかと思います。私の子供達のためにも、これからの漁業を魅力のある安定した産業に変えていけたらいいなあと思います。